

## 「ショーム 時空を超える宝飾芸術の世界

### ～1780年パリに始まるエスプリ～」展

JGS 会員 Y.K (C.G.J., F.G.A., D.G.A.)

猛暑の続く8月の終わりに、ショーム展に行ってきた。

館内は照明が落とし気味で、薄暗く感じたものの、ジュエリーは、光を拾って輝いていました。ジュエリーだけでなく、関連する人物の肖像画も共に展示されており、歴史的背景と合わせて、ジュエリーのデザインと技術の遍歴を追う事が出来ました。

まず目に入ってきたのは、フランス革命の英雄『ナポレオン・ボナパルト』の肖像画です。1799年にクーデターを起こし、見事政権を獲得。1804年にフランス国王となり、その時の戴冠式の姿が威風堂々と描かれています。煌びやかに光る月桂冠、勲章頸飾、王笏、杖、剣、玉座などのジュエリー・セッティングは、ショームの創業者マリ=エティエンヌ・ニトの手によるもの。特に注目したいのは、携えられている剣。この剣の柄には、140カラットのリージェント・ダイヤモンド（かつて、ルイ15世とルイ16世の王冠に使われていた）と、その他フランス国宝のダイヤモンドを含む計42石が嵌め込まれています。当に奪い取った政権を象徴していると言えるでしょう。

この革命勝者の戴冠式のジュエリーを担当した事で、ショームは現在に続く約240年の成功を修めているのですが、ニトがパリに設立した1780年当初は、革命による敗者側、ヴェルサイユ宮廷に関わるジュエリー製作をしていました。ファッションの殿堂マリ=アントワネットの煌びやかな時代と断頭台までの経緯をも目の当たりにしたはず、と考えると、政権争奪した勝者の剣の製作は、必ずしも喜ばしいものだったとは、言い切れないのかもしれない。

革命の英雄ナポレオンの最初の妻、王妃ジョセフィーヌは、大の宝石好きだったと言われています。今回のショーム展のメインのひとつ「麦の穂のティアラ」の「麦穂」はローマ神話の農耕の女神ケレスを表わし、繁栄・肥沃・多産などの象徴でもある為、初代皇帝の妃として、ジョセフィーヌが特に好んだモチーフだとの事。現状のこのティアラは、離婚後にリモデルされたものではありませんが、モチーフの麦穂は当時のままのもの。その造形は、風の揺らぎと抜ける様を感じさせ、ショームの自然主義が伺えます。そしてアンティーク・カットのダイヤモンドの煌きが、土台のシルバーからの照り返しによって、より清らかに輝き、とても荘厳です。

植物のモチーフはまた、所持する人物の人柄も表わします。物静かで優しい性格の王妃オルタンス（ジョセフィーヌの連れ子）のオルタンシア（紫陽花）が有名です。

展示されているオルタンシアのブローチは、沢山のアンティーク・カットのダイヤモンドが使われており、地金が目立たないデザインになっています。葉脈に添ってダイヤモンドがセットされ、繊細ながら生き活きと沿る葉が表現され、花の房はトランブルーズ (trembleus; 小さなバネ仕掛) によって、僅かな振動にも揺れて、可憐です。

このブローチは現在、アインジーデルン修道院が所有しています。何故修道院？とちょっと疑問に思いましたが、「色恋沙汰についての告白を聞き入れてくれたことへの感謝」(図録 P134) として、教会へ寄贈されたとの事。王妃オルタンスの人物像と時代背景を今に物語るこのブローチが、より一層感傷的に見えてきます。

ショーメは、1780年創業より、「ニト」「フォサン」「モレル」と経て、約240年続く歴史の中で、自国の古典主義のみを愛するのではなく、日本、中国、インドのデザインを取り入れたり、アール・デコの確立にも成功したりと、常に革新的です。

1920年製作の「ローリエのティアラ」は、ガーラントとアール・デコの両方の様式を合わせ持つようなデザインで、時代の過渡を思わせます。1931年製作の「バスボローのティアラ」は、着飾ったモチーフは排除し、伸びやかではっきりとした曲線で自然主義をモットーとするショーメらしいアール・デコのスタイルが表現されています。

丁度このあたりの時期は、開花した産業技術により、ジュエリーにも画期的な発展がもたらされました。

ダイヤモンドのカット・デザインも現代のラウンド・ブリリアント・カットに近いプロポーションになってきますし、1901年に酸素アセチレンガス・バーナーが開発され、融点の高いプラチナも大量に素早く加工出来るようになり、主流であった金台に銀の施された地金(シルバー・フロント/ゴールド・バック)よりもプラチナを使うのが定着しつつある頃です。

地金が、金台に銀を施した「ローリエのティアラ」と、プラチナの「バスボローのティアラ」を対比させると、ダイヤモンドの煌き、及び全体の輝きが異なっており、地金による印象の違いを実感する事ができます。

どちらの輝きかたもデザインにマッチしていますが、前者は蠟燭の灯りで、後者は白熱電球の下で見ると、より綺麗に見えるのでは、と想像が膨らみます。

ショーメの約240年に渡って製作されてきたジュエリーは、展覧会のタイトルにあるように「時空を超える」語り部のように、フランスの歴史と産業の発展によって移り変わるモードを今に伝えていきます。また、今回の展覧会の為に製作されたジュエリーにおいても無機的な幾何学模様と自然主義の融合という挑戦があり、いつの時代においてもデザインを探求し、革新し続けている事が伺えます。

新たな時代に、新たな技術と新たな素材。使われる宝石の種類も増えて、可能性も広がります。この可能性を具現化しているショーメの作品を今回多数見る事ができ、大きな感激を得ることができました。